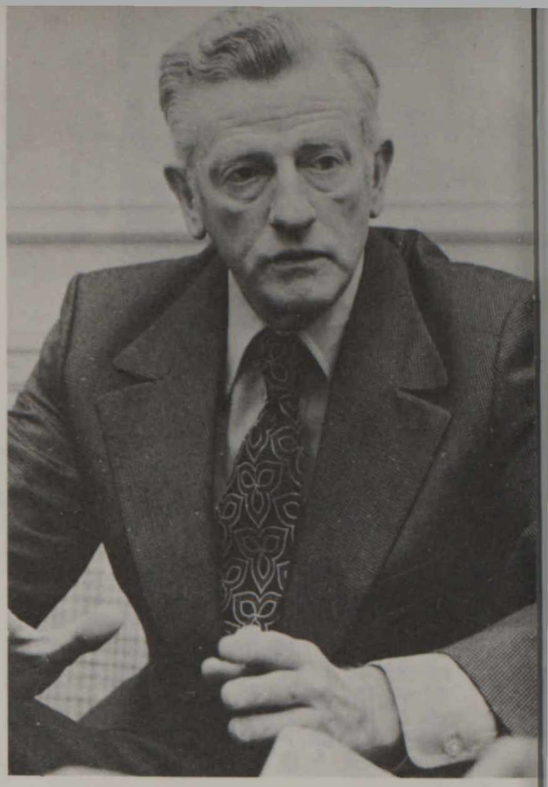

ランキン大使が着任

多角的日加関係の発展を強調

ロス・キャンベル前駐日カナダ大使の後任として二月に来日したブルース・I・ランキン新大使は、三月八日皇居で天皇陛下に信任状を奏呈、正式に就任した。ランキン大使は、各国で商務官や商務担当参事官を勤めたあと、駐ベネズエラ大使（兼ドミニカ共和国大使）ニューヨーク総領事などの要職にあった。また国連でも、経済社会理事会のカナダ代表や国連総会第二委員会（経済財政委員会）の一員として活躍するなど、通商・外交の経験は豊富。

ランキン大使は、日加関係がちょうど拡大期に入るときに着任した。日加貿易は、往復で年間約四十億ドルに達し、日本はカナダにとって米国に次ぐ世界第二の貿易相手国であり、日本にとってもカナダは天然資源などの重要な供給国。また、「第三の選択」と呼ばれるカナダの多角外交政策において、日本はカナダの経済以外の対外政策においても、ますます重要性をましてきた。こうしたことを背景に、日加両国は一九七四年、「今後さらに政治、経済、文化、科学技術等、多岐にわたる分野で協力関係を育成、拡大し、かつ充実したものにすべく不断の努力を行い、もって日加関係の基盤を一層幅広く、かつ深みのあるものにする」ことに合意した。このことはその後も再度確認され、昨年東京で開かれた第七回日加閣僚会議では、両国政府が産業協力、科学技術計画、投資、合弁事業、資源エネルギーの共同開発――などの諸問題について一連の探求的な話合いを行うことを決めた。現在、日加間で、鉱物・エネルギー委員会、科学・技術委員会、農業・食糧委員会、住宅基準委員会などの担当者会議が遂次開かれ、また科学技術交流などに関するいろいろな協定もできている。

カナダとしては、日本との関係をただ単に貿易だけに限らず、その他の諸分野にまで拡げ、そして深めたい意向で、これについてランキン大使は「日刊工業新聞」との会見で次のように語っている。

「この方面（文化、科学技術交流）の両国間の交流は現在始まったばかりといっていい。でも両国政府が百万ドルの基金を設立し、カナダ研究、日本研究をそれぞれ行うことが決まっているし、留学生の交換も実施している。現に日本にくる飛行機の中で、日本の運輸省に研究生として派遣されるカナダ人に会ったし、日本からもカナダの開発したカンドゥー型原子炉の研究に人を派遣している。また文化面だが、両国とも芸術家、音楽家、バレー・ダンサーなどを積極的に送り込み、交流を深めていくことが大切で、あらゆる分野で日本とカナダの関係をより深いものにしたい」

多角的日加関係の発展はまだその緒についたばかりである。しかし、着々といくつかのレールはすでに敷かれてきており、今後の進展が期待される。三月には国会議員有志の間で日加議員連盟が結成され、四月にはカナダから議員団が訪日を予定するなど、日加間の交流は一段と広がり、そして深まりそうだ。

ランキン大使は一九一八年三月十八日生まれで、今年五八才。アルバータ大学を卒業後（一九四一年）、海軍予備隊に入隊。一九四五年通商産業省に入り、シドニー、ボンベイ、マドリッド、上海の各地で副商務官、シドニー、ボンベイ、マドリッドで商務官、ベルン（スイス）で商務担当参事官、ニューヨークで副総領事を勤めた。六四年から七〇年まで駐ベネズエラ大使（兼ドミニカ共和国大使）、七〇年から昨年十二月、駐日大使に任命されるまでニューヨーク総領事の職にあった。また、国連で経済社会理事会のカナダ代表を二年間勤めたほか、七年間国連総会経済財政委員会のメンバー（一九七二年には委員長）であった。

日本にはモナ夫人の同伴で赴任した。娘が三人いて、すべて外国生まれ。二人はすでに結婚、三番目はモントリオールの大学で物理療法を勉強している。

信任状奏呈のため2頭だての馬車で皇居へ向かうランキン大使。大使一行（大使のほか、ドーソン公使、ゴーラム公使、モードン参事官、ウィンフィールド参事官、ホワイトレー大佐、ラボワー等書記官）は、午後2時20分、宮内庁差し向けの馬車3台に分乗してパレス・ホテルを出発、坂下門交差点を通って皇居に到着、湯川式部長のお迎えを受けた。一行は「千草の間」で待機したあと、午後3時、正殿「松の間」で陛下に信任状を奏呈、馬車列でホテルへ帰館した。奏呈式には、日本側から、松沢国務大臣（行政管理庁長官）、安井式部官らが同席した。